

親和的学級づくりに向けた短時間グループアプローチ継続実践の効果

曾山和彦 (名城大学)

キーワード：グループアプローチ，短時間，学級づくり

目 的

主体的・対話的・深い学びのある授業をよりスムーズに展開するためには、学びの場である学級がルールとリレーションに支えられた親和的な集団であることが求められる。筆者はこれまで学校現場との共同研究に携わり、生徒の「かかわりの力」(主にソーシャルスキル、自尊感情を想定)育成を目的にした週 1 回 10 分の「短時間グループアプローチ」(Short time Group Approach, 以下, SGA)の実践と効果検証を重ねてきている。本研究では、中学校生活の 3 年間, SGA に取り組んだ生徒の自己評定から, SGA の継続実践効果を検証することを目的とした。

方 法

(1)対象：A 中学校 3 年生 189 名 (2)調査時期：2018 年 4 月～2019 年 3 月 (3)内容と手続き：A 中学校では、2016 年度より筆者のスーパーバイズを受けながら週 1 回 10 分の SGA (名称は「桜咲タイム」)実践を行っている。対象である 3 年生は入学時から年間約 30 回の桜咲タイムを体験してきた生徒であり、その内容として、1, 2 年次は「アドジャン」「二者択一」「いいとこ四面鏡」の 3 種の演習、3 年次は「1 分間スピーチ」に取り組んだ。SGA の基本展開は下表の通りである。教師は「話す・聴く」等のソーシャルスキル育成をねらったソーシャルスキルトレーニング、自他の思考・行動・感情への「出会い、気づき」を促す構成的グループ・エンカウンターを明確に意識しながら 10 分間の活動を進めた。

<SGA の基本展開；1 分間スピーチの例>

1. ルール提示・確認
2. 模範提示 (初回の活動時のみ)
3. 「1 分間スピーチ」(4 人組を基本。一人 1 分ずつ)
4. スピーチに価値付け (話す・聴くスキルをターゲット)
5. スピーチに関するフリートーク (2 分)
6. 振り返り (2 分。口頭で、時には用紙記入)

(4)測定具：生徒の学級適応状況、及び SGA 効果を測定するため、Q-U (調査は 6 月と 12 月)及び SGA に関する生徒自由記述アンケート (調査は年度末 3 月)を実施した。

結 果

(1)Q-U：調査の有効回答数は欠席及び記入漏れがある生徒を除き 189 名であった。Table 1 は、6 月と 12 月に実施した Q-U 各得点 (友人関係、学習意欲、教師関係、学級雰囲気、進路意識、承認、被侵害)について対応のある t 検定による分析の一覧である。結果から、友人関係

(両側検定： $t(188) = 4.11$, $p < .01$)をはじめ、すべての得点において有意なプラス変容が認められた。従って、3 年生は、6 月から 12 月にかけて学校生活に対する意欲、学級への満足度が向上したことが示唆された。

Table1 A 中 3 年生 (189 名) の Q-U 得点 6 月・12 月 平均値の比較

	6 月	12 月	t 値
友人関係得点	18.20 (1.88)	18.61 (1.75)	4.11**
学習意欲得点	15.85 (3.00)	16.30 (3.39)	2.17*
教師関係得点	15.58 (3.06)	16.09 (3.19)	2.86**
学級雰囲気得点	16.59 (2.83)	17.41 (2.74)	4.13**
進路意識得点	15.46 (3.54)	16.82 (3.21)	7.30**
承認得点	37.56 (6.47)	39.64 (6.42)	5.84**
被侵害得点	14.51 (4.76)	13.57 (4.25)	3.83**

() 内は標準偏差 * $p < .05$ ** $p < .01$

(2)生徒の自己評定：「3 年間の桜咲タイムを振り返って」という質問に対し、「桜咲タイムのおかげで社会で働く時に必要な受け答えや質疑応答の知識・マナーを身につけることができた」「自分も成長したと思うが、回数を重ねるごとに学校・学級の雰囲気もよくなった」等、生徒の記述内容からは自分自身の成長や学級全体のプラス変容を認めている様子が多く見てとれた。

考 察

本研究の対象は、A 中 SGA；「桜咲タイム」導入時に入学した生徒である。6 月の Q-U 各得点が全国平均よりも高く、学級適応の良好さが示唆される状況にあったのは 2 年間の SGA 実践の継続が「かかわりの力」育成に奏功していたからではないかと推測される。そうした適応の良好さが、年度後半の 12 月にはさらにプラス変容したということは、3 年間の SGA が実を結び、授業をはじめとする学校生活全般に「かかわりの力」が活かされたからではないかということもまた推測される。本研究は、比較対照群の設定がない研究ゆえ、結果から示された 3 年生の状況の良さ、プラス変容を SGA 効果として断言することには無理がある。しかし、桜咲タイムへの感謝に溢れる生徒の言葉を目にすると、SGA 継続実践は、多くの 3 年生の充実した学校生活の背中の一押しに寄与したと言えるのではないかと考えられる。今後も引き続き、よりよい SGA 実践を創りあげ、それを各地に広げるためにデータ収集・分析を進めたい。

付 記

本研究は JSPS 科研費 17K04888 の助成により実施した。